



団塊世代の腕まくり —いま伝えたいこのメッセージ—

◎図書館からのインフォメーション		
企画展「歴史のなかの教科書～算術・算数と数学～」開催のお知らせ	2	
附属学校への学内便による図書貸出サービスについて	3	
ホームページを活用しよう！「ホームページ紹介pt. 2」	4	
◎特集記事 団塊世代の腕まくり —いま伝えたいこのメッセージ—		
団塊世代の読書人	渡邊 徹	6
仕事の整理？	猪平 眞理	7
中年おじさんの腕まくり	山田 春樹	8
ヴァレンタイン・ジェネレーション	藤田 博	9
◎学生の読書室～私が選ぶこの一冊～（第5回）		10
◎新任教員からひとこと「私と図書館」		
ライフヒストリーからみる図書館	吉田 剛	12
学問的探求心の芽生えと図書館	堀田 幸義	13
◎図書館から		
常設展示「大正・昭和のこどもの歌」		14
平成18年度図書館運営委員と図書館職員		15
◎表紙の解説 パートナーを探せ—花の生き残り作戦—	佐藤 秀二	16

図書館からのインフォメーション

企画展「歴史のなかの教科書 ～算術・算数と数学～」開催のお知らせ!!

平成18年度も展示企画として「歴史のなかの教科書 ～算術・算数と数学～」を下記のとおり開催します。戦前戦後の小学校、中学校、高校の算術・算数及び数学の教科書、並びに江戸期の教科書である往来物の一部を展示します。この機会を逃さず是非ご覧下さい。また、初めての企画として記念講演会を開催致します。どちらの講演も楽しいお話しになる予定です。あわせて皆様のご来場をお待ちしております。

- 開催期間：平成18年7月26日（水）～8月4日（金）、8月7日（月）
- 開催時間：午前10時～午後4時（7月29日、30日の土日も開館します。）
- 開催場所：宮城教育大学附属図書館多目的閲覧室
- 記念講演会：平成18年7月29日（土）於：図書館2階
 - ① 午後1時～ 和算のテキスト～ベストセラーもあった～
講師：土倉 保（東北大学名誉教授）
 - ② 午後2時～ 教科書・和算・林鶴一～折り紙をなかだちにして～
講師：萬 伸介（宮城教育大学教授）

入場無料

平成18年度 宮城教育大学附属図書館特別展示企画

歴史のなかの教科書

～算術・算数と数学～

開催期間：
7月26日(水)～8月4日(金)、8月7日(月)
(29、30日の土日も開館します)

開催場所：宮城教育大学附属図書館1階 多目的閲覧室

開催時間：午前10時～午後4時

展示内容：附属図書館で所蔵している和算、算数、数学の教科書等資料を展示します。また、数学教育講座の「林鶴一」展覧会の中からも一部展示します。

記念講演会

7月29日(土) 図書館2階 **入場無料**

① 午後1時から…和算のテキスト～ベストセラーもあった～
講師：土倉 保（東北大学名誉教授）

② 午後2時から…教科書・和算・林鶴一～折り紙をなかだちにして～
講師：萬 伸介（宮城教育大学教授）

協力：宮城教育大学附属図書館 企画：宮城教育大学附属図書館

図書館からのインフォメーション

■ 附属学校への学内便による図書貸出サービスについて

図書館では、学内便による附属学校への図書貸出を開始しました。

これは、附属学校教職員が図書館の図書を借用又は返却しようとする際の便宜を図り、附属学校との相互協力を促進して研究・教育活動に資することを目的としています。

〈実施方法〉

1. 貸出依頼の方法

貸出を受けようとする場合、図書館の所蔵検索（OPAC）等で希望する図書の検索をし、氏名・連絡先・書名・図書番号など所定の事項を明記の上、メール、FAXまたは郵便で、図書館に申し込みます。

2. 図書の搬送

貸出図書は、毎週火曜日に学内便で附属学校事務室へ搬送します。

3. 図書の受け取り

利用者は、附属学校事務室より貸出依頼図書を受け取ります。

4. 図書の返却

利用者は、返却期限日前の月曜日までに、附属学校事務室に借用図書を返却します。

附属学校事務室は、毎週月曜日に学内便で附属図書館へ搬送します。

5. 貸出期間と貸出冊数

貸出期間：1ヶ月

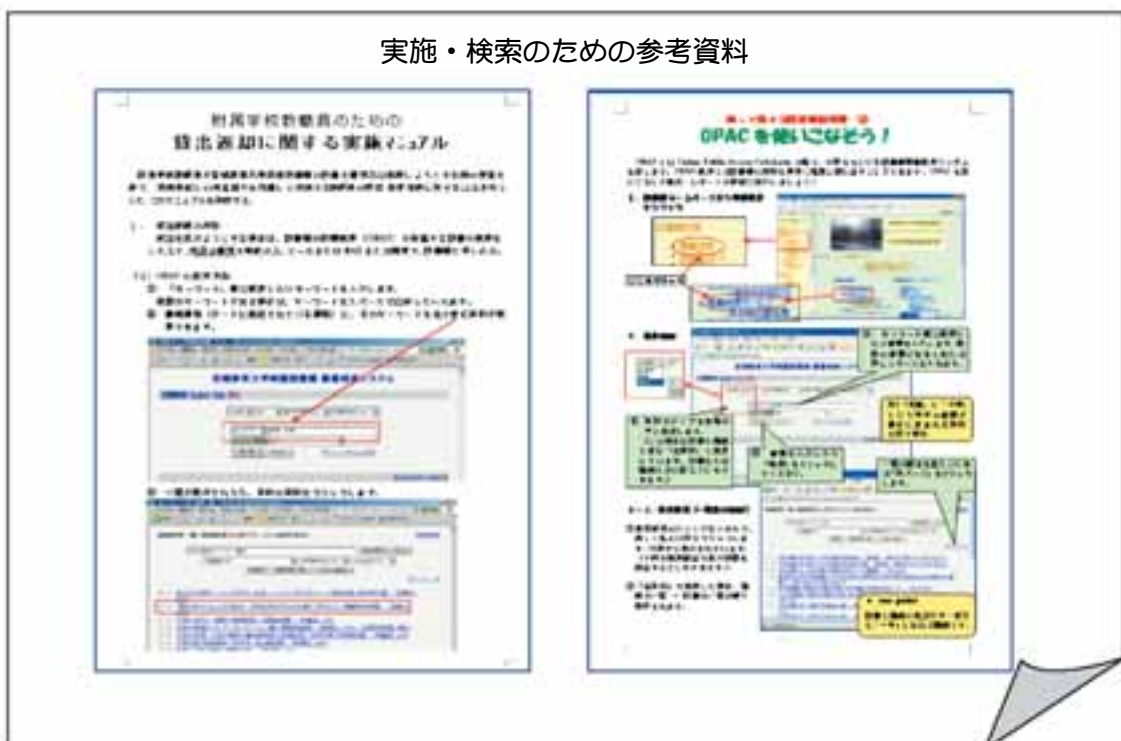
貸出冊数：10冊まで

6. その他

利用証の運用については、情報サービス係が対応します。

パソコン利用が難しく、図書の検索（OPAC）や所在の確認ができない場合等は、遠慮なくカウンター（022-214-3350）へお問い合わせ下さい。

実施・検索のための参考資料



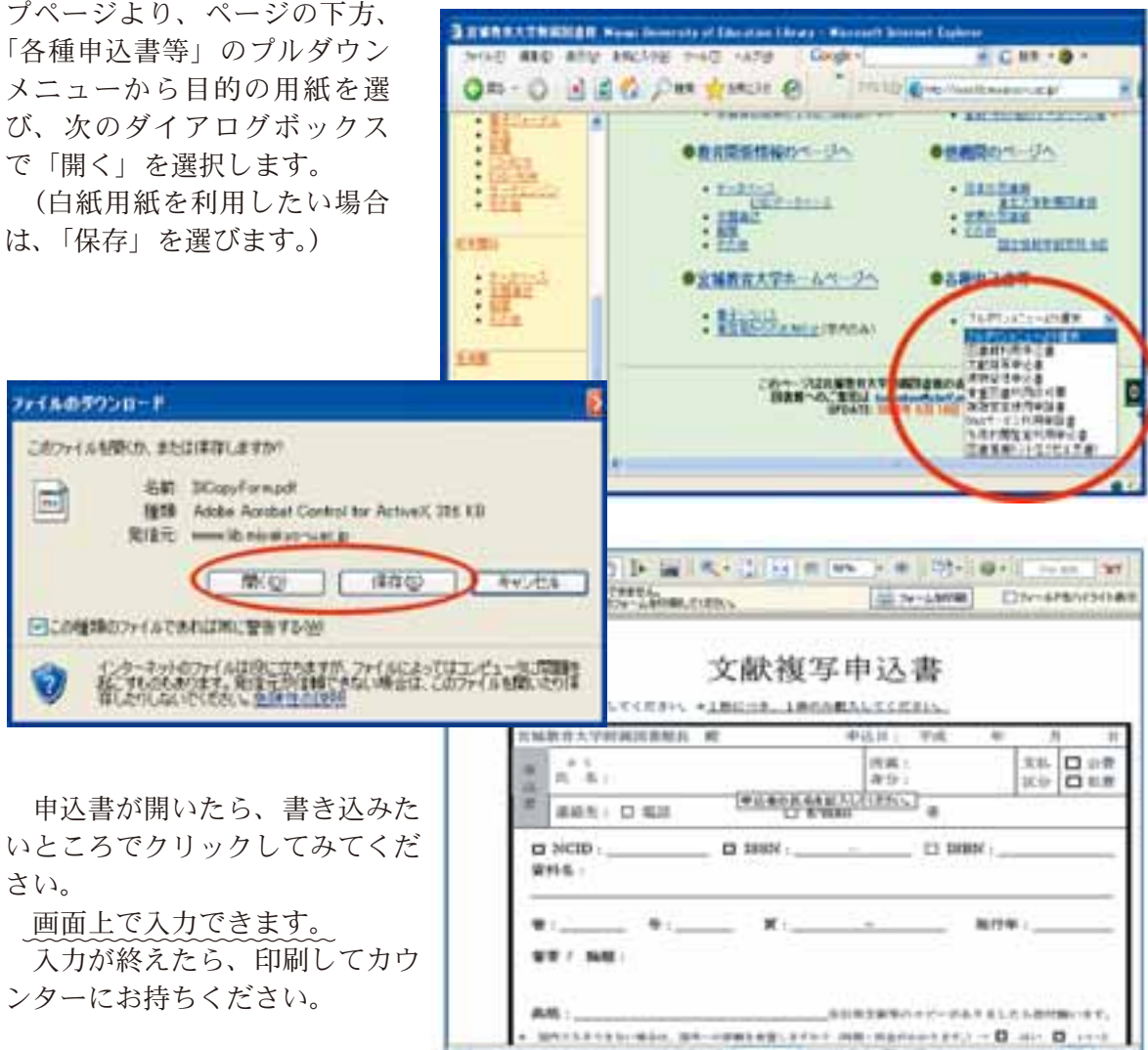
図書館からのインフォメーション

■ ホームページ紹介 (part.2)

- ・「文献複写申込書」等の各種申込書をホームページから

図書館ホームページのトップページより、ページの下方、「各種申込書等」のプルダウンメニューから目的の用紙を選び、次のダイアログボックスで「開く」を選択します。

(白紙用紙を利用したい場合は、「保存」を選びます。)



申込書が開いたら、書き込みたいところでクリックしてみてください。

画面上で入力できます。

入力が終わったら、印刷してカウンターにお持ちください。

申込書には下記のような種類があります。

これらは、*PDF形式のファイルになっているので、Adobe Reader等で開いてから、書き込みの上印刷できます。

「文献複写申込書」「現物貸借申込書」「視聴覚室利用申込書」

「多目的閲覧室利用申込書」「図書館利用申込書」「貴重図書利用許可願」

「Webサービス利用申請書」他。

これらの申込書を、どうぞ有効にご利用ください。

なお、申込書等で『こうだったら便利なんだけれどなあ』と思うことがありましたら、情報サービス係までお知らせ下さい。

図書館からのインフォメーション

・Webサービス利用申込について

このWebサービスは、図書購入やILL（文献複写、相互貸借）を申し込む際に、図書館に図書購入請求票やILL申込書を提出するために来館せず、ホームページから行うことができるシステムです。（現在は教員のみの利用となっています。）

利用に先立って、「利用申請」をする必要があります。

先に紹介した「Webサービス利用申請書」に必要事項を記入の上、カウンターにご提出ください。利用が可能になりましたら「Webサービス利用確認書」に利用者番号と初期パスワードを記入してお返しします。

① 図書館のホームページから「Webサービス利用」をクリックします。



② 申込画面が開いたら、左上の「利用者番号」「パスワード」に「Webサービス利用確認書」に記入されている通りに入力し、[OK] ボタンをクリックすると右下画面になります。

図書購入申込の場合は「図書」ボタンを、現物貸借または複写申込みの場合は「ILL」ボタンをクリックすると、画面下半分にNACSIS Webcat（総合目録データベースWWW検索サービス）の画面が現れて、依頼ができるようになります。



詳しい利用方法については、「利用申請」をする際にマニュアルをさしあげますので参考にしてください。

特集記事：団塊世代の腕まくり—いま伝えたいこのメッセージ—

団塊世代の読書人

渡 邊 徹

私は昭和22年生まれ。268万人という出生数が物語るように、戦後の「ベビー・ブーム世代」とか「団塊の世代」といった言葉でくくられる、何かと話題の多い世代の一員です。この世代が生きた時代がどのようなものなのか、勿論出生直後は知る術ありません。しかし物心ついた頃から、とにかく「物がない」こと、やたら「同級生が多い」ことを徐々に実感することになります。前者に関して言えば、食糧事情や医療が劣悪で、昭和20年代半ばまで乳児死亡率が6～7%、この高い数字はその影響の一部を示しています。後者に関しては、私が在籍した高校は1学年7クラス、1クラス55人のスシ詰め教室がその実情を表しています。

圧倒的多数の中で、物がなく、常に競うことを余儀なくされた人間は、一体何をよりどころに生きればいいのかのでしょうか。私にとってそれは、あまり金をかけずに精神的満腹感を得て、他人と競わなくてすむ「本を読みあさる」ことだったのです。吉幾三が「新聞ねえ。雑誌もねえ。おらの村にはなんにもねえ」と歌うように、私の育った田舎町には本屋も図書館ありません。自分の家、学校の図書室と公民館の本をほとんど読破した後は、近所の家を訪ねて、その家にある本を片っ端から読ませてもらいました。「来たの？いいよ。本読んでいると、いるかいにかわかんないものね。」とおばちゃんは噂の本好き少年を温かく迎えてくれるのでした。農家なのに「本ばかり読んでないで家の手伝いでもしろ」と言われたことは一度もなく、また「この本を読みなさい」と強要されたことも一度もないのです。無類の本好きの祖父がいて、本を読むことに両親が大変寛容だったことは幸いでした。想像をたくましくして、自由自

在に遊ぶことができる読書の楽しみをかなり早い時期から知ることができ、そして後年趣味が「本屋巡り」になったのは、こうした環境と団塊世代に生まれたおかげかもしれません。

高校は往復1時間、大学は往復2時間ほどの汽車通学。指定席ようになってしまった席で読む本はもっぱら文庫本や新書の類。今になって思えば、ずいぶん贅沢な時間だったことがわかります。暮らしのテンポが倍速になり、何でもたやすく情報を得ることが可能な現代では、毎日これだけの時間を読書に費やすのは至難の業。しかも読書の楽しみを実感していない人間にとって、今更「さあ本を読みましょう」と言われても、それは無理な注文というもの。それでも読書の楽しみを知ってしまった人間の悲しい性か、「読書はいいよ」と人に勧めずにはおれません。たとえば、吉川英治文庫『三国志』（講談社）を一冊だけ読む。でも続かなかったら小休止。ちょっと横道に逸れて漫画の『三国志』。次いで狩野直貞『三国志の知恵』（講談社現代新書）。気分直しに灰谷健次郎『兎の眼』（新潮文庫）、おもしろかったら、そうそう、この際だから灰谷の全作品読破といきましょう。それから角川ハルキ文庫の『現代俳句歳時記』（角川春樹事務所）を開き、『大辞泉』（小学館）と『古語辞典』（旺文社）で難解な言葉調べ。一つの作品、一人の作家、一つの言葉を切り口に芋づる式に続ける読書。これで一日はあっという間に終わります。これ「継続は力」「こだわりは情緒の安定」を目指した渡邊風読書癖。真似して学生諸君の中に読書人が一人でも増えたら、図書館から表彰されるでしょうか。

（附属特別支援教育総合研究センター長）

特集記事：団塊世代の腕まくり—いま伝えたいこのメッセージ—

仕事の整理？

猪 平 眞 理

私は日本の人口の最大の塊（マス）、今、07年問題として注目される世代の一員です。この世代は常にその数のために社会に話題を振りまき、注目される存在でした。

私の来し方を振りかえてみますと、小学校に入学すれば教室が不足して二部授業、東京の郊外でしたがクラスの人数は60人に近かったと思います。授業は午前と午後の部が1週間交代、午後の部では3年生の帰った後、まず給食を食べて授業が始まりました。中学はと言えばこれも東京の多摩川に沿った住宅地でしたが、クラスは68名、1学年には12クラスもあり、まさにマンモス学校でした。さすがにこうした状態は小学校でも中学校でも1年間だけで、近くに新設校ができて少々改善しましたが、高校も含めてクラスの人数は常に55人程度を擁していました。

宮城教育大学の少し前の卒業生に海外青年協力隊でネパールに行った人がおり、70～80人を受け持つとんでもない授業をさせられる、生徒は理解できるのだろうかと思きのメールをもらったことがありました。いやいやそれに近いことはついきのうの日本にもあり、その中で育った私たちがいるのだということを書き送り勇気づけたことがあります。日本の教室に隙間ができるようになったのは先頃のことなのです。

私どもの成長の過程にはその後も△△不足、〇〇難は続き、百万人の受験地獄までありました。そして大学では紛争の当事者世代として社会とのぶつかり合いも経験しました。けれど何より幸運だったことは、高度経済成長に乗って職業を得やすかったことではないでしょうか。近年の教員採用の狭き門などを見ていると、もしこれが私どもの時代であったなら、大変な社会の混乱を招いたのではないかと思います。このラッキーな時代背景の中で経済的自立を

果たし、結婚難を心配されながら何とかクリアしてニューファミリー時代をつくりました。

国家や戦争によって自らの生き方を選択しにくかった上の世代とは違い、私どもは戦後生まれの平和の申し子とも言われましたが、実は同じ戦争によって第一次ベビーブームのこのマスができたわけで、若い人たちには戦争という歴史の災いが及ぼす重さをこんなところからも実感してもらえればと思います。

そうした私どもも来年には還暦を迎えます。私という個人にかえてみれば、未だ次々と湧くように出てくる仕事と格闘している毎日なのですが、このところ考えるのはやはり今後についてです。まず、自らの力が発揮できる時間には限りがあって、それを自覚しなければと、そして反省をも込めて仕事を整理し、できることに“腕まくり”して最善をつくしたいと。ただ、それができれば良いのですが、実行となるとどうでしょうか。

そして一区切りがついたら、運がよい場合には長い老後が待っています。ここに至れば私たちにはどこに行っても、その時々悲喜こもごもを分かち合える同級生達がたくさんいます。多くの仲間と切磋琢磨しながら人生を送ってきた私どもは、世間からはいろいろ取りざたされても実害としては感じていないと思います。むしろ何があっても価値観をあまり異にしない仲間が身近に存在し、共感できる安心感が私どもを支えてきたのではないのでしょうか。

老後はバラ色と結びたいのですが、団塊の世代の命名者である堺屋太一はその小説の中で「——この世代が老年になったときに民族の秋が来る——」と書いていました。穏やかな終末を迎えたいと願うところです。

（障害児教育講座）

特集記事：団塊世代の腕まくり—いま伝えたいこのメッセージ—

中年おじさんの腕まくり

山 田 春 樹

僕は探偵小説が好きである。そこに登場する名探偵には、足で稼ぐタイプと、いすに座って考えるタイプがある。後者をアームチェアー・デテクティブというが、こっちの方が格好いい。それに何より楽である。

僕は怠け者なので、あんまり働かなくても良さそうな数学を専門に選んだ。「博士は目をつぶり、じっと腕組みして瞑想し、やがて、わかった！とつぶやいた」なんて、格好いいではないか。アームチェアー・マセマティシャン！

ところが現実はそうではなかった。数学科で勉強をはじめてしばらくして、僕は数学が頭脳労働ではなく肉体労働なのだという事に気づいた。数学は腕組みしてやるものではなく、腕まくりして、汗と涙を流して、泥まみれになってやる仕事なのだ。しまったと思ったときはすでに遅く、僕には数学しかやるものがなく、以来数学教師として生きてきた。だから今さら腕まくりして「さあやるぞ」という気はおきない。むしろ腕組みして、若い人の働くのを斜に眺めながら、「そこは違うんじゃないかな、ワトソン君」などと言える身分になりたいものだと思っていたところに、「団塊世代の腕まくり」をテーマに作文せよと命じられた。

「木を見て森を見ない」ということばがある。確かに自分の育てている木こそが大切なものだと言い張って、森全体に自分の木を植えたがる人もいて、これは大変困ったことである。しかし、視点を変えて考えてみると、森を知ることについて別の面が見えてくる。

森（＝世界）は多様である。森の秘密は森を眺めていても分からない。森の中にある木のたった一枚の葉、木の下にすむたった一匹の蟻、それを深く観ることが森の秘密を解明することにつながる。いやむしろそれこそが森の秘密を解き明かす唯一の道なのだ。学問というのはそういうものであ

り、大学とはそのようにして研究し、教授するところだと僕は思う。

しかしながら、学問をする者は確かに「木を見て森を見ない」過ちに陥りやすい。「森を理解する」ことをつい忘れ、今自分の目の前にあることにこだわってしまうことがある。そしてこれを避けるための極めて有効な方法が「読書」である。本を読むことで僕たちは、色々な人が見た「世界」を、その秘密を垣間見ることが出来る。僕はそのようにして多くの人たちから「世界」を学んだ。ギリシャのプラトンおじさんには、ソクラテスおじさんの生き方と、デルフォイ神殿の神託の言葉「汝自身をしれ」を教わった。フランスのサンテグジュペリおじさん、ロシアのドストエフスキーおじさん、ドイツのハイデッガーおじさん、イギリスのチェスタートンおじさん、花巻の宮沢賢治おじさん、越前の道元おじさん、そして、聖書を通して天の神さまから、僕は様々なことを学んだ。学生時代、競い合うようにして本を読み、徹夜で語り合ったのは、団塊の世代の学生寮の仲間たちだった。はじめて「思想」に出会ったころ、僕はまだ若くて、世界は謎に満ちており、僕の可能性は無限であると思われた。

そしてあれから30年以上たち、世界は依然として謎に満ちてはいるけれども、今はそれほど狂おしくその謎に挑もうということもなく、憑かれたように本を読むこともなくなった。人生の残された時間は限られており、僕はそれをいかに使うべきかを考えなくてはと思いながら、日々の生活に追われて生きている。

思索のあとの「風が立った、生きていかなければならない」という気持ちをもう一度味わいたいと思いながら、今の僕は、腕まくりなんかしなくても人生に挑んでいける学生諸君の若さをうらやましく思う。

(数学教育講座)

特集記事：団塊世代の晩まくり—いま伝えたいこのメッセージ—

ヴァレンタイン・ジェネレーション

藤 田 博

朝まだ早いロンドン、その街角にある郵便ポストの前に若い女性が立っています。郵便集配人がやって来るのを待っているのです。一時の感情で恋人にひどい手紙を書いてしまった、それを取り戻したいからです。以下、愛をめぐる二人のやりとりがつづきます。イギリスの作家ジョン・ウェインの短編「ヴァレンタイン・ジェネレーション」です。タイトルは、女性の言う、「あなたの世代は互いに贈りものをつづけてきたのだと思います、ヴァレンタインカードを。センチメンタルなことばか何かをくつつけて」によります。世代の違いを前面に、皮肉まじりに言っているのです。「取り引きをしましょう。愛とは何かを言って下さい。もし私がそれに同意できれば、手紙を返すことにします」、規則違反を承知で集配人が約束をします。それに対する若い女性のとっさの答えは、「それは、つまり誰かとずっと一緒にいたいということ」です。

いまならあり得ない話ということになるのかもしれませんが。ラブレターであれ、その逆であれ、若い女性（男性も）が書くことなどないでしょうから。それはこの作品の書かれた時代ということ、そして手紙を大事な手段と考えるイギリス人だからということにしておきます。それにしても、若い女性の相手を集配人にし、定年を目前に控えた（「40年仕事をしてきた」「結婚して40年近く」から年令がわかります）60間近とした作者のねらいは何なのでしょう。センチメンタルと言われながらも、首を覚悟で手紙を渡してしまう集配人と若い女性の世代の違いを強調するため、理由の一つがそれなのは言うまでもありません。手紙が作品の中心、だから集配人ということも。もう一つあります、ヴァレンタインに込められた「心変わりしない者」の意味です。集配人は、そして、「ヴァレンタイン」・ジェネレーションは、かたくななまでに真っ

直ぐなのです。

この郵便集配人、というより、親しみを込めて郵便やさんに自分を重ねてしまうのです。昭和30年代とは、貧しさを知り、弱さを知っていた時代、家の中に闇が残っていた時代、それだけ文字通りの一家団欒が生きていた時代です。その30年代をどの年令で過ごしたかが大きな意味を持つと思っています。小学校入学が昭和29年4月、高校を卒業したのが昭和41年3月です。小、中、高が丸ごと30年代にくくられることになります。兄弟が多い、同級生が多いことから我慢することを覚えました。遠回りの意味を覚えたと言ってもいいかもしれません。手紙という遠回り（携帯やメールと比較すれば、その差は歴然としています）の重さもその一つです。競争、競争と言われつづけて生きてきた、だからこそ、ことばが相手に届くことの大切さ、キャッチボールの大切さを知っているのです。

マザーグースを扱っている授業で、ルイス・キャロルの絵手紙の解説を課題としたことをきっかけに、手紙を書いてもらいました。条件はマザーグースのおもしろさを誰かに伝える、ただし、その誰かから友だちは外すというものです。どうしてそう条件付けをしたかはわかりいただけるはずですが。添削して返したその後、是非それを両親や先生に出すよう伝えました。手紙の届くことのうれしさを誰より知っているのは両親であり、先生だからです。

郵便やさんと同じ、定年までカウントダウンの年令になりました。定年のその日まで、手紙を書くことの大切さを語りつづけて、手紙を書くよう言いつづけていくつもりです。それこそ、自称「ヴァレンタイン・ジェネレーション」が次のジェネレーションに伝えるべき仕事と思っているからです。

（英語教育講座）

第5回 学生の読書室 ～私が選ぶこの一冊～



『ぼくを探しに』

(シルヴァスタイン 著 倉橋由美子 訳、
講談社、1979年)

1年：齋藤 礼 梨

「パクン」といえば想像していただきやすいと思うのですが、そのような姿をした主人公が、自分のかけらを探しに行く絵本です。物語の構成は到って単純、絵が白黒な上、主人公はただの欠けた丸、従って、見た目にはなんとも素っ気ないページが続きます。添えられた言葉もわずかです。読むのに5分もかかりません。

主人公は、完全な丸になることを望んで旅をつづけています。しかし、苦労してようやく自分にぴったりのかけらを手に入れ

た瞬間、今まで見えていたものが見えなくなります。それは明記されていませんが、「そういうことだったのか」という主人公の科白から読み取ることが可能です。その科白の深さといったらありません。

この本にはさまざまな解釈があります。男女関係の象徴という説も存在するほどです。しかし、解釈は何であれ、読んだ人が、読み始めたとき想像していた以上に深く考えることになる点だけはまちがいありません。私はこれを、大人のための絵本と思っています。初めて読んだのは高2のときですが、最後は声を上げて泣いてしまいました。いまでもこの絵本を思い出すと、こみ上げてくるものがあるのです。

『デジタル家電がこどもの脳を破壊する』

(金澤 治 著、講談社、2005年)

修士1年：佐久間 美樹子

デジタル家電は、今日の私たちの日常生活に大きな影響を与えています。この著書は、特にTV・ビデオの長時間視聴が乳幼児の言語発達や社会性の遅れを生じさせることについて説いています。脳の発達のメカニズムという点からそれを解明しています。

著者は、てんかんを専門とする医師です。TVやTVゲームを長時間視聴している最近のこどもの脳は退化しているという内容は衝撃的でした。また、当時随分騒がれた平成9年の「ポケモン騒動」や、増えているこどもの「TVゲームてんかん」にも触れています。子どもの生活習慣の乱れが脳への障害を引き起こしており、それは、子どもに責任があるのではなく、大人の責任だ、との思いを強くした一冊でした。

『星の王子さま』

(サン=テグジュペリ 作、河野万里子 訳、
新潮社、2006年)

3年：鹿志村 知 代

砂漠に不時着した「僕」と小さな自分の星を出て、いくつかの星を旅した後、地球へとやってきた王子様のお話です。私達は、成長すればするほど、多くのことを学び、経験して、豊かな人間になっていけるように感じているかもしれません。しかし、本当にそうなのでしょうか。成長するにつれて、忘れてしまったり、意識しなくなってしまうたりすることもあるから

はないでしょうか。そんな疑問に、ふと立ち止まらせて考えさせてくれる1冊です。

私が特に印象的だったのは、王子様には、自分の星にあった、1輪の花と、地球で目にした5千本のバラをまったく異なるものとして捉えられたという場面でした。どこにでもあるような花ではあっても、共に過ごした時間、関わり合いの積み重ねから、王子様にとっては他とは比べることのできない、かけがえのない存在となっていたからではないでしょうか。

この関係は、教師と子ども、子どもと教材にもあてはめることができるのではないかと、考えさせられました。

『授業の発見』

(武田常夫 著 一荃書房、1976年)

3年：相 澤 知 佳

この本には、武田先生が島小・境小で体験された質の高い授業のこと、共に働く教師たちの努力や成長する様子が書かれています。

武田先生はあとがきで、「教育とか授業とかいう仕事はたえず教師が成長し、みずから変革しあたらしく自分をつくりかえてい

く行為を前提として成立する営為である。」と述べています。私はこの言葉どおり、教師の成長なくして、児童・生徒を成長させることなどできるわけがないことを強く感じさせられました。自分が成長するためにどうあるべきか、何を心がければよいのかについても、私なりの答えを出すことが出来ました。教職に就きたいと考えている人には、ぜひこの本を読んで、教師の仕事というものの可能性やすばらしさを感じ取ってもらいたいと思います。

『ミュンヘンの中学生
—シュタイナー学校の教室から』

(子安 美知子 著、朝日新聞社、1980年)

3年：齋 藤 智 佳

テストがない、教科書がない、そんな学校だったらどうですか。

何て楽でいいのだろう、それで学校が成り立つのかなどと考えるのではないでしょう

か。ドイツ・ミュンヘンのシュタイナー学校の教育は、私が教育に対して抱いている常識を覆すものでした。そこで行われる授業は少し風変わりです。博物館に行き、昔の王様の冠のスケッチをする歴史の授業、実

験の内容を細部まで思い出してノートに記録する物理の授業、そしてシュタイナー学校独自の「オイリュトミー」、「フォルメン」といった授業…。こんなことをして本当に勉強になるのだろうかと思って読んでいました。しかし、シュタイナー学校の子どもは、歴史を自分のすぐ身近にあるもののように捉えます。公式を暗記するのではなく、そのプロセスを自分の感性にまで込み込ませます。そこには生き生きとした「人間」の姿がありました。

百聞は一見に如かず、どうぞこの本を読んでみて下さい。教育への新たな見方が生まれるかもしれません。

『バッテリー』

(あさのあつこ 著 角川書店、2003年)

3年：佐 竹 優

勝つためか、楽しむためか、部活動にはこの問いが常に付きまとう。勝つためなら楽しみなど必要ない。エースピッチャー・巧はそれである。巧は、自らの才能を過信している。いい球を投げさえすれば、打たれることはない、負けるはずがないと信じ

ている。巧が投げるのは一方通行、ストレートなのである。

そこに現れたキャッチャー・豪。豪とのキャッチボールを通し、巧は少しずつ変わっていく。自分の球が全て、だがそれを受けするのはいつも豪であって欲しい。絶対の自信を持ちながらも、豪のミットに投げ込む安心感が巧に生まれていく。完璧な球を目指す指先から伝わる思春期の心の葛藤が、鋭く、瑞々しく描かれている。

ここは学生の皆さんが最近読んだ本、印象が強かった本、お勧めの本などについて自由に選んでいただき紹介してもらうコーナーです。図書のみとし、雑誌は除外しています。

たくさんの原稿が集まりました。ありがとうございました。

いただいた原稿を編集委員会で選定し掲載させて頂きました。

今後もこの企画を継続していきますので、皆さんからの投稿をお待ちしています。

ここに紹介する本は図書館入り口の書架に「学生の読書室」として配架しています。

【原稿大募集】

次号発行は3月の予定です。

名前、所属、学年、連絡先と、紹介する本の書名、著者名、出版社を記入の上、400字以内で、図書館カウンターにフロッピーディスクで、または下記アドレスへお送り下さい。

尚、「こもれび」の記事は図書館のホームページでも公開されます。

seiri@staff.miyakyo-u.ac.jp (菅原)

図書館に所蔵していない図書については、学生希望図書として図書館に購入希望を出していただくことも出来ます。

新任教員からひとこと：『私と図書館』

ライフヒストリーから見る図書館

吉 田 剛

☆私のライフヒストリーの中にある図書館

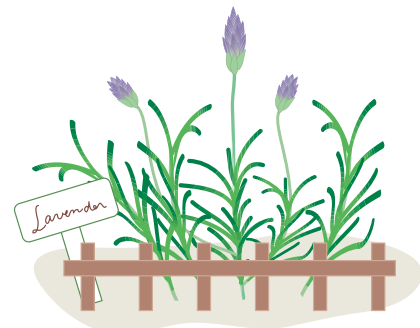
- 小学校・中学校時代は、ほとんど図書館を活用せず、その必要も感じていませんでした。もともと活字嫌いで、漫画や図鑑も好きではなく、国語が嫌いでした。もっと、読書をしていたらとよかったと後悔しています。
- 高校時代は、図書館を大学受験のための学習の場として利用する機会が多くありました。その気分転換の時間を使って、興味ある分野の図書を読み始めた時期でもありました。ただ、読んだ内容は頭の中にすっきり入ってこなかったような気がしています。
- 大学時代の図書館は、ゼミのための自主学習のための場となり、専門図書・専門雑誌を広く読み始める場となりました。どの分野の専門書や雑誌が、図書館のどの辺りにあるのかがやっと明確になってきました。世の中には幅広い学問分野があることを知り、あちこち見回っている時期でした。
- 大学院時代は、学術雑誌の文献検索を数多く行うために、図書館の必要性を強く感じた時期でした。またこの時は、現在では信じられませんが、私の一日あたりの読書量は、新書一冊分は軽く読め、人生の中で最も読書好きの時代でした。なおアルバイトで稼いだお金のほとんどが、そのための購入費となりました。

○ 現場教員時代は、業務が多忙なために、図書館に出向く機会を失っていました。そこで書店で教育関係の雑誌を購入する機会が増えました。ただ専門研究へのあこがれから、専門の書籍や文献を図書館で閲覧したいという願望が、心の奥底に潜んでいたと思います。

○ 4月から宮城教育大学の大学教員となり、業務上、図書館は必要不可欠な存在となりました。まだまだ宮教大の図書館をよく知ってはいませんが、無限の可能性を秘めた「未知なる知の冒険」の場であるような気がしています。

私のライフヒストリーの中で、図書館の果たす役割や意味が変わってきています。その時々生き方と情報受容のあり方が変化をもたらします。図書館をどのように活用するのかは、人それぞれと思いますが、いずれにしても「未知なる知の冒険」の場であることに変わりはないでしょう。

(社会科教育講座)



新任教員からひとこと：『私と図書館』

学問的探究心の芽生えと図書館

堀 田 幸 義

高校時代までの図書室や図書館とは無縁な生活が、大学に入り一変することになる。試験を乗り切り、レポートを提出する必要性に迫られたことがその理由であった。読書好きの少年でも向学心あふれる青年でもなかった私は、試験対策やレポート作成を契機に図書館へ足を運ぶようになったのである。何ともお恥ずかしい話である。

学部時代の私を特に悩ませたのはレポートである。小学生の頃から文章を書くことが大の苦手で、長文を書いた経験などほとんど無かったため、400字詰め原稿用紙10枚以上を要求されるレポートを提出期限までに仕上げることは、誠に大変な作業であった。まず、文章の書き方からわからない。どのように始め、どう論理展開し、意見を述べ、論を結ぶのか、皆目見当がつかないのである。仕方なく図書館へ行き、講義内容と関係のある文献を探し出し、それを読むことから始めた。どういった事柄を論点として設定すべきか、ノートと先行研究とを睨みながら必死に考え、自分なりの形で文章化したのを覚えている。この試行錯誤が意外な効果をもたらすことになった。いつの間にか、何かを調べることに面白味を感じるようになっていたのである。

4年生となり、地元宮城県下の近世史料で卒業論文を書くことを希望していた私は、指導教官の先生から仙台藩家格門閥層高野家の史料『高野家記録』を紹介され、当時榴ヶ岡にあった宮城県図書館へ行き、同史料のマイクロフィルムを拝見させていただいた。館内の「郷土資料室」という所だったと記憶しているが、この部屋には宮城県関連の文献や史料が数多く保管されており、歴史学者だけではなく一般の市民の方々も

古文書を閲覧しに来館されていた。マイクロフィルムは自由に閲覧可能で、藩制期に作成された文書についても申請をすれば手にとって見る事が出来た。意外に簡単な手続きで古文書が見られることに驚き、江戸時代の人びとが書いた文字を自分の手元で間近に見られるだけで嬉しかった。『高野家記録』を読み込んでいく中で、高野家の仙台屋敷が「川内亀ヶ岡町前」にあったことを知り、親近感を抱き、また、「亀岡八幡宮」に関する記事を見つけた時には、思わず「おっ」と声を上げ、昔を思い出してしまった。亀岡八幡宮と言え、高校生の頃に部活の筋トレで汗を流した場所であり、私にとっては非常に思い出深い場所だったのである。

大学院、特に博士後期課程に進学してからは、仙台市泉区紫山へと移転した宮城県図書館の「みやぎ資料室」に入り浸り、史料調査に明け暮れることになる。いわゆる切れ者でもない自分がオリジナルな研究成果を上げるには、兎にも角にも史料を読み漁り、新しい論点を見つけ出す以外に方法は無く、「みやぎ資料室」にある所蔵目録をチェックし、研究の素材となりそうな史料を片っ端から閲覧したのである。使えそうな史料を発見するたびに、嬉しさや安堵の気持ちが入り混じった何とも言えない感情が込み上げ、図書館に眠る歴史史料を調査・発掘し、それらを使った研究活動を行うことに夢中になっていった。

以上が図書館をめぐる思い出である。私にとっての「図書館」とは、調べること・探ることの面白さを教えてくれた場所であり、歴史史料の魅力を直接的に感じさせてくれた場所であった。

(社会科教育講座)

図書館から

常設展示「大正・昭和のこどもの歌」

図書館の2階で、4月から8月末まで、宮城教育大学附属図書館が所蔵する「大正・昭和のこどもの歌」に関する資料の常設展示をしています。

展示は3期に分かれ、5月末までの第1期には、尋常小学唱歌集や童謡の楽譜集など大正時代に発行された資料の展示を行いました。6月の第2期には、昭和（戦前）期の資料として、唱歌集や童謡に加えて、大人も子どもも一緒に歌えるようにと企画されたラジオ番組の「国民歌謡」で放送された歌の楽譜の展示を行いました。6月7日（水）に開催された講演会では、本展示の企画者である音楽教育講座の小塩先生が、大正から昭和にかけてのこどもの歌の歴史を、CDで曲を流し、時には先生ご自身の歌も交えてお話され、楽しい時間を共にしました。音符だけでは解りにくい歌も、耳で聞くと懐かしく甦ります。学外からわざわざいらっしゃった方もいて、熱心に聴いておられました。

7月3日（月）からは、第3期昭和（戦後）の展示が始まり、8月いっぱい行います。「歌は世につれ、世は歌につれ」という言葉がありますが、日本の子どもたちがどんな歌を歌ってきたのか是非覗いてみて下さい。過去の展示資料については、図書館ホームページで見ることが出来ます。



第1期資料より
『新作童話』



第2期資料より
『国民歌謡 ラヂオ・テキスト』



第3期資料より
『NHKみんなのうた』



講演会の様子

平成30年度宮城教育大学附属図書館 常設展示

大正・昭和のこどもの歌

「歌は世につれ、世は歌につれ」という言葉があります。昔の日本の子どもたちがどんな歌をうたっていたのでしょうか。今回の常設展示では、宮城教育大学附属図書館が所蔵する「大正・昭和のこどもの歌」に関する資料を展示します。展示期間、館内各フロアで展示しています。

期	内容	展示期間
第1期	大正時代のこどもの歌	展示期間：平成30年4月13日（月）～5月26日（日）
第2期	昭和（戦前）期のこどもの歌	展示期間：平成30年6月24日（月）～7月7日（日）
第3期	昭和（戦後）期のこどもの歌	展示期間：平成30年7月3日（月）～8月31日（木）

★ 講演会
音楽教育講座の小塩先生が今回の展示について講演を行います。
日時：平成30年6月7日（水）14：40～16：10
場所：附属館1階 多目的閲覧室

★ 展示資料解説会
音楽教育講座の小塩先生がこの時期の展示について解説を行います。
第1回：平成30年4月24日（月）
第2回：平成30年6月24日（月）
第3回：平成30年7月7日（金）
14時～16時 附属館 2階201室～2階202室
場所：附属館2階 第二展示室
宮城教育大学附属図書館 附属館1階

ポスター

図書館から

平成18年度図書館運営委員と図書館職員

図書館運営委員

	氏 名	所 属
委員長（図書館長）	青 木 守 弘	理科教育講座
委 員	中 屋 紀 子	家庭科教育講座
委 員	田 端 健 人	学校教育講座
委 員	萬 伸 介	数学教育講座
委 員	藤 田 博	英語教育講座

図書館職員

課 長 淵 辺 剛		
専門員 菅 原 淑 子		
管理係 （係長） 櫻 井 圭 子	目録情報係 （係長）（兼） 菅 原 淑 子	情報サービス係 （係長） 沼 田 幸 子
（主任） 荒 川 幸 子	永 澤 恵 美	五十嵐 幸 子
長谷川 てい子	佐 藤 恵 美	村 上 園 子

カウンターから見る図書館

時間外職員 池口 良太

研究室の先輩の紹介でこの4月から図書館のカウンターでアルバイトをしています。

お恥ずかしいことにこのアルバイトを始めるまであまり図書館とは縁がなく、利用した事も少ししかありませんでした。一体他の人はどのように図書館を利用しているのかなと注意して見てみると、参考書や専門書などを借りて行く人、教科書や指導書の閲覧に来る人が多いようです。また図書館には小説や楽譜も数多く置いてあり、それらを借りていく人も少なくありません。

視聴覚コーナーでDVDを見る人、パソコンを使って調べ物をする人もいます。文献複写の申し込みやコピー機を利用しに来る人もたくさんいます。また展示コーナーや多目的室もあります。講義に図書館で借りた本を持ち込み、参考に使っている人も見かけました。

このように、図書館は利用しようと思えばかなり多様に使えるものであることに気付かされました。

さらに図書館は、平日は夜の9時半まで、土日は夕方5時まで、祝日以外は開いています。利用できる時間も長いので、みなさんも是非図書館を利用してみてはいかがでしょうか。

編集後記

本号の特集「団塊世代の腕まくりーいま伝えたいこのメッセージー」で、その世代の4人の先生にご執筆頂きました。新任の2人の先生からも「私と図書館」の題で文章を寄せて頂きました。学生の読書室欄にも6人から寄稿して頂くことができました。

若い読者の皆さまに、「情報があふれるこの時代に、自分自身で本を選び沢山読書をしてほしい」というメッセージがいささかでも伝わりましたでしょうか。「図書館に行ってみようか」とか、「何か読んでみようか」と思って頂けたら幸いです。
(Y.S.)

表紙の解説

パートナーを探せ—花の生き残り作戦—

佐藤 秀 二

植物には、花粉を運ぶ方法として風を利用する「風媒花」、昆虫や動物を利用する「虫媒花」があることは学校で教わったことがあるかと思います。風媒花は、名前のとおり花粉が別の花に届くかどうかは風任せなのに対し、虫媒花は、昆虫などに花粉を運んでもらうもので、そのために蜜というご褒美を用意し、目印としてきれいな花を咲かせます。とは言っても、昆虫の目と人間の目の可視波長が異なるため、私たちは違った色に見えるらしいのですが。

表紙の写真はツリフネソウです。青葉山では7月から9月にかけて見られます。和名は「釣船草」と書き、細い枝にぶらさがっている花の姿を、帆をかけた船に見立てたと言われています。花の後方がクルッと巻いて可愛いですね。ここを「距（きょ）」と言い、花弁が筒状に変化したもので、蜜が収まっています。昆虫が蜜を得ようと花

の中に潜り込んだ時、背中に花粉が付き、他の花に行った時、雌しべに花粉を付けてくれるわけです。こんな形をしているのですから、特定の昆虫しか蜜を得ることはできません。

ツリフネソウではトラマルハナバチが主なパートナーです。花にとっては、昆虫に付けた花粉を同種の花に確実に運んでもらえるので効率が良く、昆虫にとってもその花に行けば確実に蜜にありつけるという、いわゆる共生関係ができます。それでも、片方がいなくなった場合、もう一方も消え去る危険性がありますから、完全に1対1まで特化することはないとのこと。

この他にも、春にはナガハシスミレ（右）やエゾエンゴサク（左）といった「距」を持つ花が咲きます。皆さんも、たまには下を向いて歩いてみたらいかがでしょうか。

（学務課教務係）



（エゾエンゴサク）



（ナガハシスミレ）